

「トルコ見聞録」

(1976 山口建築士会誌掲載)



海峡のモスク (F4)

—アジアとヨーロッパを繋ぐ橋—

1973年10月30日・・・奇しくもトルコが共和国建国50周年を迎えたその日、永い歴史の中でアジアとヨーロッパを隔ててきた、わずか1、5km足らずのボスфорラス海峡をひとまたぎする吊橋が完成しました。文字通りアジアとヨーロッパを繋ぐ橋・・・それはイスタンブール市民のみならずトルコ全国民の国家的悲願であったもの・・・。折りしも日本でも、その日から遅れること2週間・・・関門大橋が開通したことはまだ記憶に新しい事でしょう。

トルコ・イスタンブールに於けるアジア側とヨーロッパ側との隔りを想像するには、日本のこの関門海峡を当てはめてみるとちょうど良いでしょう。黒海から流れ出す、潮流は狭いボスフオラス海峡で早い流れとなっています。それまではフェリーボートでイスタンブールの両地区、ベヨール（ヨーロッパ側）とウシュクダル（アジア側）を往来していた車は、一瞬のうちに二つの大陸をひとまたぎすることが出来るようになったというわけです。彼等にとって、実に千年采の夢に違いなかつたろう、その夢が今ついに実ったのです。

完工式の橋の渡り初めは、トルコ大統領をはじめ政府首脳、陸・海・空軍の幹部を先頭に、幸運な数万人の人々によつて行なわれました。そして不幸にもこの選ばれた人々からはみ出してしまった何十万……いやおそらくは何百万の人々は、ボスフオラス海峡を見下ろす丘という丘を埋めつくし、橋を見上げる街路という街路を埋めつくし、半ば夢を見続けていたるよつに歓喜に酔い、この日の歴史的瞬間の光景を目の人あたりにしようとしたものでした。橋の下を通過するフェリーボートも、黒海からやつて来たソ連の商船も、アメリカ第5艦隊の軍艦も、これよーとばかりに喜びの汽笛を鳴らしていました。私はその日、折よくこの祝典を見ることが出来ましたが、この国を挙げての、国民「ぞつての熱狂ぶりには大きな感動を覚えました。「これがトルコだ……彼等は今、立

ち上がろうとしている」「

見知らぬ国、見知らぬ」とば

宇部興産がトルコ国ペトキム石油公社から受注した、カプロラクタム・プラント建設工事の建築技術指導員として私が彼地へ派遣されたのは1972年の9月のことでした。トルコといえばウシュクダラ・ソングク、シシカバブーか、または御馴染みのトルコ風呂くらいのイメージしか無かった私が、前後2度にわたり、通算13ヶ月といつものそこで生活するハメになろうとは……

プラント建設の手初めはまず建築設計から、といふことで、指導員のうちでもまずトップ・バッターに立たされたわけです。ママヨ！トルコ風呂にでも行くつもりで・・・とばかり、わずかばかりの予備知識でいよいよ本物のトルコでの生活にドッププリと首まで浸からなければならなくなつた次第です。私が赴任したのはイスタンブールから東へ90km、マルマラ海に面したイズミットという所ペトキム社での毎日の技術的な折衝は全て英語でこと足りるのですが、生活の大半はやはりトルコ語が必要になつてきます。街のレストランや買物等では、

日・土余話帳を片手にジェスチャー混じえて大奮戦でしたが、そこは良くしたもので2ヶ月も経つと、もう不自由も無く、レストランでの食い間違いも無く、タクシーも適正価格まで値切れるようにもなるものです。そして滞在も終りに近づく頃には、会社での技術打合せの席でも英語よりは早くトルコの単語の方が飛び出し、ジャパンーズ・イ

ングリッシュならぬ、ターキッシュ・イングリッシュとなってしまつたりもしました。

現場にて筆者



宿舎の外壁に飾られたトルコの国旗



トルコ人は心情的にも非常に日本人と似通つたところがあり情に厚く、礼を重んじるという性格で、同時に、日本人に対しては一種の民族的な親近感を持つている上、科学技術のリーダーである現在の日本に対してもいわば憧れのようをものを抱いていて、われわれとしても誇りに思う反面、個人としてまた会社の一員としてよりはむしろ、大げさをいい方ではなく真に日本人の一人としての自覚と責任感を始終背負つているようを境遇に置かることは確かです。トルコ語は、ヨーロッパのラテン系の言語とは全く異質で、どちらかといふと日本語に近く、主語一目的語一述語という文章構成でしかも助詞（テ・ニ・ヲ・ハ）を持つてゐるという点で、われわれには親しみやすいといえましょう。「テッペ」（てっぺん）、「イイ」（良い）、「チャイ」（茶）等、全くの偶然かも知れませんが日本語と同音同義の単語も見られます。しかし母親が「アンネ」

というのを判らぬでもないけれど、父親が「ババー」には少々弱りました。

トルコの建築と建築屋

トルコの建築を見て私がまず気づいたのはレンガ造の美しさです。民家はほとんどレンガ造ですが一般の事務所建築にしても、架構部はR・C造で壁はすべてレンガ積みです。

オリーブの緑のまにまに見え隠れするレンガの赤、そしてその壁の中に浮き出た豊かを手植えの草花そして何よりもそれらの家々が一つの集合体になった時、緑とレンガが醸しだす実にヒューマン・スケールな住環境。ル・コルビュジエが若き日、トルコでの旅でそのたぐい稀な建築感覚に打たれたという話をある本で読んだことをふと思い出しました。

さて私が実際に仕事の上でタッチしたのは当カラクタム・プラントを構成する数ユニットからなる建家の設計です。日本であらかじめの原案（主として鉄骨造・ラスモルタル仕上）を作成し、現地での実施設計に臨んだわけですが、これらは辛か不幸か？すべてR・C造とレンガによる建築へ変身せざるを得なくなってしまいました。彼等に言わせれば鉄骨・・・特に大型型鋼はまだまだ高価で品物も無く、それよりもどんなに労力と時間をつぎ込んでも、使い慣れた、また労賃の安いR・C造、レンガ積を選ぶのです。化学プラントのプロセス・配管の実情から見て多少の無理はありましたが、ついにこの変更に踏み切ったわけです。さてコンクリート打放しとレンガによる工場建築・・・想像してみ

て下さい。われわれから見れば本当に工場にしておくには惜しいような建築です、それに加えるに、彼等建築屋はさすが地中海・ラテンの血を引いているらしく・・・美は機能と経済性に優先するという暗黙の使命感を持っていますこれはもはやわれわれ日本人の経済セオリーでは越え難い民族の壁のようをものです。私は、彼等の情熱と、わが社のケミカル・エンジニア達との板バサミになってしまいました。「私もいつばしのデザイナーだ。あなた方の意図は本当に私には良くわかる、しかしもう少し考えてくれ、当カラクタム工場は、美しいことよりも、まず最後には製品が出てくれなくては困るのだ。

さて会社における私の直接の相手はMr. ソイダンという建築技師でした。瘦身の私と対比するに、デッププリと太り、体の割に弱々しい声の、それでいて明瞭なブリティッシュ・イングリッシュを話す彼は、ベトキム社のチーフ・エンジニアでした。まさに丸一年余、朝から晩まで彼とは図面と首っ引の毎日でした。時としてお互い仕事の話となると相談らず、お国の女性の話となると大いに絶讚し合い・・・。そこは、お互い同じ穴のムジナ、二人共建築屋であるという自負と共感・・・大いに意氣感ずるところあって、幾度も彼の家には夕食に招かれ、また彼の愛車「アナドール」（トルコの高原）であちこち旅させてもらひ「」とが出来ました。「日本に一度行って見たい・・・」と田舎を輝やかせていた彼、Mr. ソイダン。最近の彼からのたよりでは、建築屋をやめて農耕をしたい・・・

とか。何と「自由な」、「ひれで」、「そいつ」建築が出来るのだ。

歴史の宝庫トルコ

ホメロスの長詩「イリアス」に詠われているトロイ戦争の伝説を信じ、ついに一八七〇年、伝説の都トロイを発掘したドイツの考古学者、シュリーマンの遺業はあまりにも有名です。トルコの北西部、ヒーベ海に面したこのトロイの小高い丘にある遺跡に立ち、今、文字通り風化した城壁の石積みの跡を見る時、三〇〇〇年という、気の遠くなるような時流れに今更ながら驚かざるを得ません。知将オデュッセウスによるトロイの木馬はこの丘のあたりにあり、そして、いったいどれほどの大きさだったのだろうか……と空想を馳せたりもするのです。

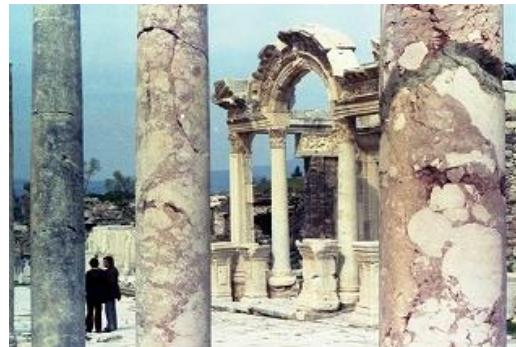


3000年の風雪を生き抜いてきたトロイの遺跡跡

ギリシャ時代、ローマ帝国時代、そしてビザンチン時代を通じ、おのの時代の華やかな舞台となってきたこのアナトリア（トルコ）には、今なお、各時代のおびただしい遺跡、エフェス、シティ、ペルガモン、テルモッソス、ベルゲ、等々が残っており、多くは荒れるがままに放置されているにもかかわらず、いかにもそれらは、太陽と海と草原の中で生々

しく息づいているようで、ガラス箱の中の歴史を見慣れているわれわれ日本人にとつては、ことさら興味尽きぬものがあります。また、セルジューク・トルコによりイスラム文化が興り、16世紀その絶頂に達し、アジア、ヨーロッパ、そしてアフリカまでにその権力を誇った、いわゆる、オスマン・トルコ帝国時代の遺物、遺構（セント・ソフィア寺院、ブルー・モスク、トプカヒ宮殿等）は建築的にも圧倒的な迫力をもつてわれわれに迫り、ただ、驚嘆するばかりです。

これらあまりに偉大な過去を背負っている国が、今まさしく、ものすごいエネルギーで近代化を推し進めようとしているのです。



エフェスのトラヤヌス神殿



イスタンブールの丘のブルーモスク

トルコの識者の多くは、日本の経済発展の実情、また公害の実情についても驚く程よく知っています。彼等が口をそろえて、「この海の色が本当の『メディタリニアン・ブルー』（地中海の青）だ・・・」といって自慢しているエーゲ海、そしてマルマラ海のあの青さが、彼等の辞書から消えることの無いよう祈りたい気持です